

雑感「新しい気づきへ」

住職 千坂げんぼう

今年の春は寒暖の差が激しく、人も植物も戸惑いがちである。一関地方に春一番を告げる祥雲寺の樹齢百五十年以上と言われる枝垂れの四季桜は、例年より十日ほど早く三月中旬に花を付けた。ところがその後の寒さで、いつこうに見頃に到達しない。いつもは四月十日前後に行われる作家色川武大（麻雀小説では安佐田哲也）を偲ぶマージャン大会で満開状態になるのだが、今年は三分咲きという状況であった。

春の到来が順調でない時は、かえって山野草の小さな生命がいつも以上に健気（けんけい）に見える。樹木葬墓地では、間伐したため光をたっぷり受け止めることが出来るようになったオウレンの群落が白く輝いている。また、クラムボン広場では、間伐と落ち葉の掻き出しの成果でミスミソウが増えている。私の始めた樹木葬は、大きな木、花が目立つ木以外の小さな生命にも目を注ぐことが出来るようにすることだが、そのためにやっている間伐等の山仕事は着実に里山を復興させている。

知勝院では、墓地・境内以外の自然再生事業は、「久保川イーハトーブ自然再生研究所（以下研究所と略）に委託する形を取っている。

昨年、「にほんの里100選」選定、「第一回プロジェクト未来遺産」登録、今年、「ため池百選」選定と久保川イーハトーブ世界の顕彰が続いたのは、研究所に委託している諸々の作業の賜物である。

今年は十月に生物多様性締約国会議十周年（略称・生物多様性COP10）が名古屋で開催されるため、国は今年を生物多様性年と位置づけている。そのため知勝院が委託している研究所の仕事が大分注目されているのだらう。この顕彰を確かなものに行っている大きな力が、東京大学大学院農学生命科学研究科保全生態学研究室の研究者であることは皆様も承知のことである。

研究所では従来の研究をもっと深めるため、ニホンミツバチを利用して、花粉から久保川イーハトーブ世界の植生を分析することになった。もちろん分析するのは東京大学大学院の研究者だが、蜂の生態に詳しい盛岡市の養蜂家藤原誠太氏にも協力をいただくことになった。氏は銀座のビルでニホンミツバチを使った蜜蜂採取を行っていることなどで知られる。

この度、藤原氏の指導のもと、庫裏と悠々庵周辺に巣箱を六個設置した。新しい試みは新しい気づきを与えてくれる。これも素晴らしい自然を提供してくれる久保川イーハトーブ世界があったからである。この自然を後世に引き継ぐことの重要さを前にも増して痛感する日々である。



オウレン